

# オアシス新聞

第二十六号  
錦に染まる秋の野山(紅葉の仕組み)

緑陰深き山々が、気温の低下と共に錦の衣をまとったように赤や黄色へと紅葉してゆきます。秋の女神龍田姫が袖を振ると山が染まるという素敵な言い伝えもあり、秋の紅葉はなんとロマンチックな趣があります。

紅葉といえは真っ赤なモミジを思い浮かべますが、イチョウやカラマツの金色やブナの金茶色などもいいですね。さてこの紅葉のメカニズムを皆さんはご存知ですか？

紅葉は朝晩の冷え込みが厳しくなり、最低気温が8度以下になると始まると言われています。そしてきれいに色づく条件は、日中の天気がよく、朝晩の寒暖の差が大きいこと。横浜あたりでは寒いと言ってもそれほど厳しい冷え込みではないため、東北や高原と比べると色づきはいいまいちとなってしまう。

それでは色の違いはどうか。一般的に葉は緑色をしています。これはクロロフィルという緑の色素が含まれているためです。気温が下がると葉の働きが弱まるとクロロフィルが分解され、もともとあったのだけだと緑色の陰に隠されていた黄色い色素のカロテノイドが目立つようになるのです。これが黄葉です。

赤い紅葉はといいますと、落葉樹は冬に葉を落とす準備として、葉柄の付け根に離層と呼ばれる組織ができます。そうすると今まで葉と幹の間を行き来していた養分が、移動を妨げられ葉の中にとどまります。光合成によつてつくられた糖が離層に阻まれて葉に蓄積され、その糖に日光が当たることによって新たにアントシアニンという赤い色素が作られ、葉が赤くなるのです。

なんだかとても難しいお話となりましたが、つまりは寒さで緑色の色素が弱まって元々あった黄色い色素が目立つようになり、さらには晴天によって赤い色素が作られる。美しい紅葉を見るためには寒さと晴天が必要だ、というわけです。そんな仕組みがわかったら、難しいことは考えず頭を空っぽにして、美しい紅葉を楽しんでみましょう。

散歩道で見かけた  
きれいな落ち葉を  
拾い集めて持ち帰ったら  
小かごなどに入れて  
飾ってみればいかかでしょう。  
色とりどりの吹き寄せを  
秋の夜長にながめていれば  
たくさんのお話が  
聞こえてきそう...



紅葉というと木の葉の事はかり思い浮かべてしまいますが、  
足元の普段見慣れた身近な草も、赤や黄色に紅葉します。  
秋に色づく草の事を草紅葉(くさこみじ)とも言います。  
チガヤやエノコログサの葉、  
茎まで赤みを帯びる  
シックな装いのイヌタデ。  
春に咲きその後は  
ほとんど忘れられてしまっ  
スィバなどは  
赤や黄色、緑の混りあった  
複雑な美しさで  
再び存在感を現します。

